

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikers 二つの血を持つ聖王

なのは四期アニメ化希望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 二つの血を持つ聖王

### 【Nコード】

N3793Z

### 【作者名】

なのは四期アニメ化希望

### 【あらすじ】

『流星の射手と鋼の走者、若き槍騎士と竜騎の召士、四つの希望が集う時、二つの血を持つ古の若き王が目覚ます……』  
転生者でない聖王と霸王の子供がStrikersの時代に送られる話。

これは『黒い月の聖王』のリメイクです。

## プロローグ（前書き）

新たに書き始めました。よろしくお願ひします。

## プロローグ

時は古代ベルカ諸王時代

シュトウラにある城の一室で、2人の若い男女が産まれたばかりの赤ん坊を見つめていた。

「私達の子供…」

「綺麗な金色の髪に『鎧』…君の血を濃く継いでるようだね。」

碧銀色の髪を持つ男…クラウスが、赤ん坊の頬を撫でている金髪の女…オリヴィエに話しかける。

「でも目は貴方と同じよ？」

「うん。紫と青の虹彩異色…シュトウラの目だね。」

「名前は何にしましょう…」

「そうだね…シルバなんてどうだい？」

クラウスは少し悩んでから答える。

「シルバ…『森』って意味ね。」

「うん。僕達の目指す平和で緑溢れる世界…その象徴。」

「そうね…うん！貴方は今からシルバ！シルバ・ゼーゲブレヒトよ！」

そう言つてオリヴィエはシルバを抱き上げる。

「きゃっきゃっ！」

「ふふふ、シルバも喜んでるわ。」

「…この子には平和に過ごして欲しいけど…」

「無理でしょうね…でも、せめて十歳になるまでは何処かに…」

さつきまでの明るい雰囲気が消え、重々しい空気が漂う。

「…シュトウラの辺境の森の中に、ある人が治めている小さい村がある。そこで暫く育てよう。」

「なら私の顔見知りも居た方がいいわね。友人にそこで教育係と護衛を引き受けて貰うように頼んでみるわ。彼女なら安心して任せられるし。」

オリヴィエは頷きながら言う。

「もつとも、この子自身も強くなって貰わなきゃいけないし…よし！この子に僕の霸王流を教えることにするよ。」

「なら、私は『鎧』制御方法を教えるわ。」

「よし。じゃあ今後の方向も決まった事だし村の方に連絡を取ってくるよ。」

そう言うてクラウドは走るように部屋を後にした。

部屋に残ったオリヴィエは、シルバを優しくなでながら我が子の未来について考えるのだった。

「母上！父上！」

頭に子猫を乗せた金髪の少年が部屋の中に走り込んでくる。

「久しぶりだね。」

「元気だった？怪我はしてない？」

「むしろ元気が有り余ってるぐらいだよ。」

《GAU!》

頭の上の子猫：レグルスが同意するように吼える。

「それと昔みたいにな、私の事はママ、クラウドの事はパパって呼んでほしいな。」

「アリスが母上と父上って呼びなさいって。」

「ちよっシルバ様！何言ってるん「ふくん。どう言うことアリス?!?」

アリスのシルバの発言に対し抗議しようとするが、虹色のオーラを纏った修羅の気配に最後まで言葉が続かなかった。

「いえ、あのですね…王家の者としての威厳とかを考えまして…その方がいいと思っただんです。はい。」

「ちよっ、OHANASIしよっか。」

「今なんか発音がおかしかったような…って襟首引つ張らないで下さい！シルバ様も笑ってないで助けて下さいよ！」

アリスはそのままオリヴィエに連れて行かれ見えなくなった。

「そう言えば…父上、突然二人で来るなんてどうかしたの？」

シルバは笑いすぎて腹を押さえながら気になっていたことを聞く。

「ああ、これからのことで重要な話があるんだけど…オリヴィエが戻って来たら話すよ。」

「じゃあ、それまで久しぶりに稽古付けてよ！」

「うん。じゃあ広場に行こうか。」

「こつちはもう準備できたよ。何時でもどうぞ。」

「では、武装形態！」

光が収まりと、大人になったシルバがその場に立っていた。

「行くぜ！！！」

そう言つとシルバは一瞬で距離を詰め左腕を下からクラウドスに向け振り上げる。

それをクラウドスは右手を添えるように受け止める。

それを予想していたシルバはそのまま左拳に体重を乗せるように力を入れて無理矢理振り抜く。

クラウドスは足に力を入れその場に踏みとどまり左拳をシルバの原に向け突き出す。

「霸王断空拳！！！」

シルバはそれを腹に力を入れわざと食らい、その力を利用して上に跳び、クラウドスの背中に降り立ちそのまま振り向きざまに右手で裏拳を打ち出す。

クラウドスはしゃがみながら振り返り裏拳をかわし攻撃に移る。

猛攻を受け後ろに下がり距離を開けたシルバに対し、クラウドスは声

をかける。

「今のは良かったよ、シルバ！」

「そう言いながら、かなり余裕そうだけど……！！！」

シルバは返事をしながら再び近づく。

クラウスがそれに対してカウンターを入れようとした瞬間、シルバは特殊なステップを踏み再び後ろを取り、右拳を打ち出す。

「！？？」

「霸王断空拳！！！」

今度はシルバが断空拳を放つ。

その拳はそのままクラウスに直撃する。

決まった！とシルバが思った瞬間クラウスの拳がシルバの肩に突き刺さり、シルバは回転しながら吹き飛んだ。

「うん。いつもよりかなり早く一本取れたね。」

「一本取れたのは嬉しいけど……かなり痛い。」

「技が決まったからって、すぐ気を抜くからだよ。これからは決まった後も気を抜いちゃ駄目だよ。」

「はい。」

いつの間にか試合を見ていたオリヴィエとアリスが近づいてくる。

「かなり強くなったみたいね。」

「そう言いながらシルバを抱きしめるが……」

「痛い！母上肩が！」

その行為がシルバの怪我を悪化させてしまう事になった。

シルバ達はイスに座ってオリヴィエ達が訪れた理由を聞いていた。

「では、やはりここに来たのは戦争の激化が理由ですか？」

「ええ。シルバには戦争の恐ろしさを知って欲しくて、何度か私の騎士として戦場に立って貰ってたでしょ？」

「…うん…」

オリヴィエの言葉にシルバは辛そうな顔をしながら返事をする。

「これからの戦争はもっと激しくなる…だから逃げて欲しいの。」

「…別の世界ですか？」

「いいえ。」

「…別の『時代』よ。」

## プロローグ（後書き）

シルバ『俺は不死身だ、この世に自分の存在を刻み付けるその日まで、永遠に！』

シルバ「この場はしばらく、『黒い月』からの変更点を書くことになってます。」

キャラ「今回ののは、目の色・戦争への参加…ですね。」

眠り（前書き）

初の予約投稿です。

## 眠り

「別の時代…ですか？」

「ああ、別の時代だ。」

シルバの呟きにクラウスが答える。

「ちょっと待って下さい陛下！そんな事の出来る魔法聞いたこと有りません！どうやって…」

「もうちょっと静かに話して。」

悲鳴に近い声で話すアリスをオリヴィエが遮る。

「あ、はい……って、これが叫ばすにいられますか！どうやって送るんですか!？」

「それは俺も気になる。説明してくれ。」

「分かったわ。」

そう言つてオリヴィエは説明を始める。

「先日、ローラン兄様がシルバの為に『コールドスリープ』と呼ばれる魔法を発動させる道具を用意してくれたの。」

「…コールド、スリープ？」

「ええ、体温を下げ、体の成長を止めてに眠らせる魔法。」

「まあ、分かりやすく言えば『冬眠』…かな。」

オリヴィエの言葉をクラウスが補足する。

「私たちはね、シルバに生きて欲しいの。」

「いろんな所に行つて、いろんな物を見て、いろんな事をして、自由に生きて欲しい。」

でもどうせなら、この時代の誰も知らない世界、未来の世界に生きて欲しい。」

これは私達からのお願い。私達がシルバにして欲しいことなの。」

オリヴィエ達はシルバの瞳を見つめながら話す。

「お前は強くなった。もう自分を守ることが出来るほど。」

「俺はまだ父上にも母上にも一回も勝つてない!…!」

「当たり前だよ、そんなに僕達は弱くない。その僕から一本取ったんだ。誇って良い。頼む…分かってくれシルバ。」

「そんなの二人の我が侭だ！俺はみんなで居られればいい！」

「…正直ね、この戦争で私達が死んでしまつかもしれないの。我が侭でも良い。言うことを聞いて。このとおりよ。」

おもむろに立ち上がると二人はシルバに頭を下げた。

「…頭を上げて。そこまでされたら…もう断れないよ…」

シルバは泣きながら言う。

「ありがとう、シルバ。」

「でもこれだけは…聞いて欲しい。」

「何んだい？」

「一週間だけ一緒にいて…お願い。」

それを聞いたオリヴィエはシルバを抱き寄せて言った。

「もちろん、私達もそのつもりよ。」

一週間後、村の人達に挨拶を終え四人は聖王家の隠れ家に居た。

「これが…」

「まるで棺ですね…」

シルバとアリスが呟く。

「この中に入ったら私達が魔法を発動させるわ。」

「…うん。」

「ふう…間に合ったみたいだな。」

突然ドアが開き金髪の男性が入ってくる。

「兄上！？」

オリヴィエが驚きの声を上げる。

「どうして…」

「僕が教えたんだ。」

「クラウドス…」

オリヴィエがクラウドスを睨みつける。

「止めなさいオリヴィエ。私が頼んだんだよ。可愛い甥の見送りをさせてくれてね。」

「ローラン伯父様…」

「すまないなシルバ。父上や兄上達がお前に冷たく当たって…」

「そんな…」

「シルバ、お前の無事を願っているよ。」

「ありがとうございます。」

そう言うとシルバはアリスの方を向く。

「今までありがとう。」

「シルバ様…どうかお元気で。」

そして最後にオリヴィエ達に向き合う。

「シルバ…元気に育ってくれよ。」

「体調には気を付けてね。」

「はい…父上、母上。」

全員との挨拶が終わり、シルバは装置の中に入ったのを確認するとオリヴィエ達は魔法を起動させた。

「どうか…この子が目覚めた時代が平和でありますように。」

オリヴィエの呟きは空に消えていった。

## 眠り（後書き）

シルバ『異物の混じった空間。ここはテメエの知る場所じゃねえんだよ。』

シルバ「今回の相違点！」

キャラ「シルバ君の伯父・コールドスリープ：ですね。」

シルバ「ちなみにローラン伯父様の説明は後々あります。」

## 目覚め(前書き)

かなり短いです。すいませんoysz

## 目覚め

side カリム

数年前から私の元に二つの予言が現れていた。

片方は、管理世界の崩壊ともとれる予言。

そしてもう一つは、私達グラシア家…いや、聖王教会の待ち望んだ物だった。

その予言が出てから、私とシャツハは毎日の様に教会本部の最深部にある『聖王の間』を訪れている。

「騎士カリム、そろそろ時間です。」

「そう…」

私が肩を落として部屋を出ていこうとしたその時、部屋に安置されていた棺が光り出す。

「これは…!?!」

「まさか…」

光が収まり金髪の少年が出てくる。

「…ここは…」

「お待ちしておりました…『聖王』シルバ・ゼーゲブレヒト陛下。」

私は頭を下げながら話しかけた。

side out

「そうか…母上は『ゆりかご』で…」

「はい…クラウス陛下はオリヴィエ陛下以外の方とご結婚なさり、子孫もいらつしゃいます。」

「…父上の子孫か…」

そう言いながらシルバは少し寂しそうな顔をしながら窓の外を眺め

る。

「…空が青い…木も生い茂っている…」

「はい。今は既にベルカの王家はございませぬ。したがって、国同士の戦争も存在しませぬ。」

「…戦争の無い世界…か。」

その後も暫くシルバはこの時代について質問をしていった。

「現在、私は六課と言う部隊に、ロストロギアと呼ばれている聖王家の聖遺物を回収して貰っています。」

「ロストロギア？」

「はい。崩壊した世界や文明の持っていた力の塊を示す言葉です。」

「で？さつき聖王家の聖遺物って言うていたが、何を回収しているんだ？」

「『レリック』です。私がそれを六課に回収するよう依頼したのに理由はあります。」

そう言つとカリムは何かを撫でるように右手を振る。すると幾つものウインドウが空中に現れる。

「数年前から、何者かがレリックを回収しているのです。」

「なに…？」

カリムの言葉にシルバは飲もうとしていた紅茶を降ろす。

「さらにレリックが発見された場所などで高エネルギー研究施設の跡などがあり……」

ガシャン

カリムとシャツハは音のした方を振り返と、シルバが持っていたコップを握りつぶしていた。

「…何処の誰だか知らんが…いい度胸だ…よし、俺をその六課とやらに入れる。」

「「はい？」」

二人はシルバの言葉に思わず間抜けな声を出す。

「だから俺を六課に加える。レリックを利用しての奴は俺がを叩き潰す！」

「しつ、しかし危険すぎます！」

「…カリム、レリックの正体って知っているか？」

「いえ…そこまでは…」

「なら教えてやるよ。聖王ってのはな自らの『鎧』の出力を上げるためにとある力の結晶であるレリックを取り込むんだ。レリックを取り込んだものが死ぬと、取り込まれた力と取り込んだ者の力…二つの力の結晶が生まれる、それがレリックだ。」

「そっ…それではレリックというのは…」

「歴代聖王の遺体だ。」

それを聞いたカリムは少し考え込む。

「…分かりました。明日六課の責任者に相談してみます。」

「ああ、頼む。」

「それとシルバ様にお返しするものがあります。付いてきて下さい。」

「そう言うとカリムは立ち上がり歩き出した。」

シルバ達は第8資料保管庫と書かれた扉の前に着いた。

「少しお待ち下さい。」

カリムはそう言うと扉の横にある機械にカードを通した。

ガチャン

鍵が外れ扉が開く。

中には直径1メートルほどの巨大な水晶が置いてあった。

シルバは水晶に手を当てある名前を呼ぶ。

「おいで！レグルス！」

《G A O O O O O O O O ! !》

シルバが名前を呼んだ瞬間、激しい光と巨大な雄叫びがあがる。

「きゃあ!?!」

少しし光が止むとそこには綺麗な鬣を生やした巨大な白い獅子がいた。

《G A O O O O O O O O ! !》

獅子はシルバの前に行き頭を下げてから再び遠吠えを上げる。

まるで主を帰還を祝福するかのようにな…

## 目覚め（後書き）

スカリエツティ『廻る廻る宙の中心…』

シルバ「相違点！」

キャロ「私と会ってません・八神部隊長の代わりにシャツハさんが話し合いに出ている。」

シルバ「ちなみに俺が眠っていた部屋…『聖王の間』は幹部以上の  
人以外は入れないらしい。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3793z/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikers 二つの血を持つ聖王

2011年12月14日12時50分発行